風土分析についての一つの考え方

京都大学工学部　正員　佐佐木　綱

1．まえがき

公共事業に対する住民の反対運動は、ひところに比べれば少なくなってきたとはいえ根強いものがある。それも自然破壊を理由にしていることが多い。日本の国には、すでに本来の自然はないのであるが、日本人にとって自然は一つの理想像としての対象であり、自然の破壊というときは自分の心の深層の破壊を意味していることが多いようである。それは多くの日本人の心に残る伝統的なアニミズムの継承によるものであろうが。したがって、自然を加工し、開発していく場合には、日本人の心に訴える新しい自然を創出していくことを考えなければならない。そこに対象とする地域の持つ風土への認識と理解が重要となる。風土というものをどのように把握し、それを分析していけばよいのであろうか。ここで一つの考え方を述べてみたい。

2．風土の構成

風土とは何かと改まって聞かれるとむずかしい問題となるが、ここでは「そこに生きているものすべてを含めての歴史的自然」とか「そこに住んでいる人々の生活を含め、そこにある文化、地物、地形、土地柄」を指すことにしておく。元来、風土はclimate と訳されており、気候がその地域の生活や生産のあり方を規定してしまっていたという意味で、それなりの意義を持っていたのであろうが、現在の感覚からすれば、あまりにも異なった表現ではなかろうか。特に日本の中で風土を論ずるとき、気候が風土に与えた影響は無視することはできないにしても、気候を論ずるだけで風土を理解することは到底不可能である。

雪国の人々は忍耐強いと言うことがあったとしても、それは風土を理解する上での一つの要因でこそあれすべてではないであろう。むしろわれわれは、その地域の文化や住民の心に残っている考え方の中に、その地域の風土－それが気候に原因するとしても－を見い出そうとしているのである。

そこで風土を理解していく方法として２つのアプローチが考えられる。一つはマクロな考え方であり、その地域の文化や歴史を土台に分析を行っていくもので、他の一つはミクロな方法であり、住民の意識－それも無意識の中に存在している特徴を見い出して、風土と関連づけようとするものである。

3．地域コンプレックス

心理学者ユングは、心は意識層と無意識層とから成るとし、無意識層は更に個人的な無意識層と、個人を越えた普遍的な－たとえば民族としての共通な、あるいは人類として共通な－無意識層から成っていると考えたのである。われわれが風土を考えていこうとする場合、意識層はすでに教育により、またコミューニケイションにより地域的な特色を失ってしまっていると考えられるので、調査に困難はあるとしても、無意識層にこそ地域本来の特色が残されているのではないかと考えるのである。そしてユングの言う無意識層の中に、地域的（空間的）なまとまりのある普遍的な無意識層と、地域を越えた民族的な無意識層とがあるのではないかと考えられるのである。すなわち、ある地域に住んでいる人達に共通の何かが、その人達の無意識層に存在しているのではないかと考えるのである。しかも、その人達の心に残されているコンプレックスに共通性があるであろうし、そのコンプレックスを昇華していく方法の中に公共事業の意義を認めようと考える立場をとるのである。

コンプレックスはユングの言い出した概念であり、その人の無意識層に存在して何らかの感情によって結合された心的内容の集まりを指すのであるが、それが通常の精神活動を妨害する現象として現われるのが常である。自我が形成されていく段階で、意識化の一面を補完する傾向が無意識に生じて、無意識層の中に、あるまとまりを持った感情をコンプレックスと言っているのである。

ある地域に住んでいる人達、あるいは住んでいた人達のコンプレックスの中に地域としての共通性があるのではないかと考えて、それを「地域コンプレックス」と呼ぼうと言うのである。そのようなコンプレックスを昇華させることが、地域住民の真の満足感を引き起こすことになるのではないかと考えるのである。

住民の意識にのぼっているニーズの調査では、何処でも同じような結果が得られ、もはや地域に適したプロジェクトを探していく方法としては限界に達しているのではないかと考えられるのである。

それではどのようにして地域コンプレックスを把握すればよいのかという問題が生じてくる。

すでに述べたように、その調査には２つの方法があると思われる。一つはそこに住んでいる住民個人を対象に、彼等に共通な無意識一特に抑圧された共通の無意識を見つけ出すミクロな方法であり、その分析方法としては心理分析的な手法を開発する必要があると思われる。いま一つはマクロな方法であり、地域の風土分析を行うものであり、それは地域ごとに残されている昔話し、民話、民間信仰などに他の地域との相違を見い出し、そこからコンプレックスを抽出する試みである。もちろん民話には、地域を越えた共通性（枠組といってもよい）があるし、一方で地域独特の特徴が認められるかもしれない。そこには陰陽学の影響も認められるであろうし、民間信仰や気候の影響も受けているであろう。民俗学者ダンダスは民話の構造を記号化して表現できるとしており、その中で「禁止（interdiction）と違反（violation）」の連鎖及び「欺まん（deceit）と成功（deception）」の連鎖の重要性を述べている。確に前者は民話の中によく出てくるタブーと見ることができ、タブーの中にはコンプレックスが隠されているものと思われる。また民話に登上してくる動物達にも深い意味が隠されているように思われる。

このような方法で地域の特性を調べ、コンプレックスを解消させるようなプロジェクトを提案していくことができれば成功であり、そこにはハードなものに限らず、ソフトなものが要求されると思われる。特に心の抑圧解消には「儀式化」による解消が有効であり、昔から村祭がその役割を果してきたのである。長年抑圧されてきた心を、いかに儀式化したプロジェクトによって昇華させるかが知恵の見せどころであろう。

４．シャドー計画

昔からの土地柄としての風土を生かしたプロジェクトを考えていくことのほかに、現在築かれてゆきつつあるコンプレックスを解消させていくことも、特に計画の対象が都市の場合に重要である。

高度経済成長の時代には、大きければ大きいほどよいといった「規模の経済」が働き、機能と経済効率が追求されてきたが、一面それによって地域住民の中に何らかのコンプレックスが蓄積され続けてきて、個人的無意識層に蓄電されたコンプレックスが放電しつつあるのが住民の反対運動ではないであろうか。

このコンプレックスの一種として、陰陽のアンバランスということがあるのかも知れない。機能性・効率性の追求は男性原理、すなわち「陽の原理」であり、これの適用によって失われるのは当然「陰の原理」である。たとえば、産業道路の拡充が逆に生活道路指向を呼びおこすのである。陽に対しては陰によって補償していくことを考えていくべきであろう。心理学において、自分のなしえなかったことを行っていくもう１人の自分のことを「影（shadow）」と呼んでおり、失われた自分のことである。ある一つの事業が行われたときに同時的に生じる「それによって失われたもの」を記録して集積しておき、ある段階で補償していくことを忘れないようにプロジェクト化していくことである。コンプレックスの解消策としてのシャドー計画と言ってよいものである。

仏教では、男性原理で動く世界を金剛界、女性原理で動く世界を胎蔵界と呼んで、両者による宇宙の構成を認識の基礎としているが、金胎一如とか金胎不二といって両者の補完性と同一性とを説いている。京都はどちらかというと女性的な町であり、女性原理の方が優勢であろうと思われる。京都駅前の京都タワーをめぐっての反対はタワーそのものが男性原理的なものであり、女性的な町にはふさわしくないと考えたものであろう。しかし現在では、それを補うものとして女性原理的な地下街ポルタが開設され、陰と陽のバランスが回復されたといえよう。大阪の通天閣は陽であり、それに対する天王寺公園は陰である。しかしながら、女性が近づきにくい浮浪者が多い公園では、機能的にバランスしているとはいえない。

高速道路は陽の施設として代表的なものであるので、それを補うシャドー計画がきわめて重要となってくる。インターチェンジを森で囲むことなども考えられてよいであろう。

日本では、壬申の乱の後、多くの計画や祭儀に陰陽学が適用されてきたのであるから、風土を理解していく上でも陰陽学の理解の必要性が高まるものと思われる。